

【論 文】

蘇軾の元祐六年に作られた詩詞について

保 莉 佳 昭

【要旨】

中国の北宋時代（960～1126）、韻文文学には、詩と詞があった。当時の文人はこの双方を作っているが、彼らが詩と詞をどのように区別して詠み分けていたのかは、非常に興味深い問題である。そこで、本稿では北宋の蘇軾（そしよく／1037～1101）の元祐6年（1091）に同時同所で作られた詩詞を取り上げ、両者の相違を考察してみた。その結果、以下のことが明らかになった。詩は仏教説話を交え、詩を贈る相手の行政手腕を称え、遊戯性は少ない。一方詞は、軽妙で思わず微笑みが漏れるような典故を用い、詞を贈る相手の文才を称え、冗談を多く盛り込み、更には賑やかな酒席の妓女をも詠んでいる。また、「美」の描写を比べてみると、詩が格調の高さを重視するのに対して、詞は妖艶さを描く。更に、詩からは真面目な官僚としての蘇軾像が読み取れるが、詞からは自由で洒脱な文人としての蘇軾像が見えて来る。つまり、詩は「硬」「雅」「堅」の文学といえ、詞は「軟」「俗」「艶」の文学といえる。この相違は、両者の文学性に因る。詩は中国の伝統文学であり、高等文官試験である科挙の受験科目の1つであり、官僚必須の教養であった。それに対して詞は、新興文学であり、元々酒宴の余興として作られ、遊戯性の強い文学であった。これが、両者の内容の相違に大きく影響していると考えられるのである。

一、はじめに

中国の北宋時代（960～1126）、韻文文学には詩と詞があった。詩は紀元前から続く長い歴史を有する伝統文学であり、一方、詞は唐時代（618～907）に興った新興文学である。当時の文人は、詩と詞の両方を作っているが、彼らが詩と詞をどのように区別して詠み分けていたのかは、非常に興味深い問題である。筆者はこの問題に着目し、北宋の蘇軾（そしよく／1037～1101）の同時同所で作られた詩詞を取り上げ、両者の相違を考察してきた⁽¹⁾。同時同所で作られた詩詞を取り上げるのは、作者が詩詞創作の際に、特に双方の違いを強く意識したはずであり、結果として作られた作品に、それぞれの特徴が色濃く出ていると見なされるからである。また、特に蘇軾の作品を選んだのは、彼が当代きっての大文人であり、その作品には作られた時間、場所、経緯等の分かるものが多く、創作に関する情報が多く得られ、より詳しい比較対照が可能だからである。

蘇軾の同時同所で作られた詩詞を年代順に見て行くと、同じ年に集中的に作られた、言わば「同一年作品群」のようなものが見いだせる。それは、熙寧七年（1074）、元豐元年（1078）、そして元祐六年（1091）に見られる。これら「同一年作品群」は、言うまでもなく制作時が近く、各々の創作態度に大きな違いは無いと考えてよい。であれば、この「同一年作品群」を考察すれば、各時期の、蘇軾の詩詞詠み分けの特色を比較的容易に帰納できることになる。筆者は既に熙寧七年、元豐元年の詩詞についてその相違をまとめたが⁽²⁾、今回は、元祐六年に作られた詩詞を取り上げて考察してみる。

本稿で取り上げるのは以下の三組九首の作品である。テキストは『傳幹注坡詞』（巴蜀書社、1993）と『蘇軾詩集合注』（上海古籍出版社、2001）を用いた。詞が前後半に分かれる場合は間に「／」を付けた。なお、文中の月日は全て旧暦である。

I 「次韻曹子方竜山真覺院瑞香花」詩

「西江月（公子眼花乱発）」詞

「西江月（小院朱欄幾曲）」詞

「西江月（怪此花枝怨泣）」詞

II 「次韻答馬中玉」詩

「木蘭花令（知君仙骨無寒暑）」詞

「虞美人（帰心正似三春草）」詞

III 「和林子中待制」詩

「西江月（昨夜扁舟京口）」詞

二、「次韻曹子方竜山真覺院瑞香花」詩と三首連作の「西江月」詞

元祐六年、杭州（今の浙江省杭州）知事であった蘇軾は、二月九日、友人の曹輔（そうほ／1068～1127）と一緒に、杭州郊外にある竜山の真覺院へ瑞香花を見に行った⁽³⁾。そこで、「次韻曹子方竜山真覺院瑞香花」詩と「西江月（公子眼花乱発）」、「西江月（小院朱欄幾曲）」、「西江月（怪此花枝怨泣）」詞を作った。まず、詩から見る。

次韻曹子方竜山真覺院瑞香花

幽香結淺紫，来自孤雲岑。骨香不自知，色浅意殊深。移栽青蓮宇，遂冠薔薇林。初為楚臣珮，散落天女襟。君持風霜節，耳冷歌笑音。一逢蘭蕙質，稍回鉄石心。置酒要研暖，養花須晏陰。及此陰晴間，恐致慳吝霖。彩雲知易散，鸚鵡憂先吟。明朝便陳迹，試著丹青臨。（『蘇軾詩集合注』卷33）

【大意】香りは灰かで、薄紫の花を咲かせ、この花は雲のたなびく山奥の峰から持ってきたもの。品のある香りをこの花は自覚しておらず、色の淡い所がことのほか趣が深い。この花を寺院（真覺院）に移し植えたところ、その美しさは元々ここに植えられていたクチナシを遂に凌いでしまった。帯に結んで屈原の帯飾りとなり、（天の花となって）天女の襟に散り落ちる。君は堅い節操を持ち、冷静に歌や笑い声に耳を傾けている。と

ころが、ひとたびこの気高い花に出会ってからは、堅い心をやや変えた。酒宴を張るには晴天の暖かい日でなければならず、花を育てるには穏やかな薄曇りの天気でなければならない。今、曇りと晴れが続いているけれども、自分の吝嗇が原因で雨が降るのが気掛かりだ。彩雲が消え易いことは分かっているが、ホトトギスが他の鳥たちに先んじて鳴くのも心配だ。明朝になれば花は散り枝しか残っていないから、いま試みに絵具で描いておこう。

詩題の「次韻曹子方竜山真覚院瑞香花」は、「曹輔が詠んだ竜山にある真覚院に咲く瑞香花の詩に唱和した」という意味。「曹子方」は、曹輔のこと。「子方」は字。なお、曹輔が詠んだ「竜山にある真覚院に咲く瑞香花の詩」は、現在、伝わらない⁽⁴⁾。「真覚院」は、本詩題に拠れば「竜山」にあった寺院のようであるが、「竜山」のやや北にある玉厨山^{ぎょくしん}にあったという記述もある⁽⁵⁾。「瑞香花」は、普通、ジンチョウゲと訳されるが、詩の冒頭に「香りは仄かで」とあるところから見ると、今のジンチョウゲとは異なるのかもしれない。

さて、本詩は、冒頭から十二句目まで瑞香花を褒め称える。この花は、元々山奥に生え、仄かな香りと淡い色が魅力的である。それを真覚院に移植したところ、他の花を凌駕してしまった。「帯に結んで屈原の帯飾りとなり」は、戦国時代（前403～前222）の楚に仕えた屈原（くつげん／前340頃～前278頃）が著した『楚辞』「離騷」の「秋蘭を結んで帯飾りとする（纫秋蘭以為佩）」という表現を踏まえる。この「秋蘭」は、美德の象徴であり、本詩では、それを瑞香花に換え「帯に結んで屈原の帯飾りとなり」と言い、瑞香花を「秋蘭」に匹敵する美德の象徴と表現している。また、「天女の襟に散り落ちる」は、『維摩経』「観衆生品」にある「天女散華」の逸話を用いる。「天女散華」は、維摩居士の家にいた天女が、菩薩たちと大弟子たちに天の花を降らせたという話で、蘇軾はそれを借りて、瑞香花を天女が降らせる花びらになぞらえている。曹輔は、酒宴に余り興味を持っていなかったけれども、ひとたびこの気高い花に出会ってからは、堅い心を変えてしまったのである。

次の八句は、瑞香花が散るのを惜しむ気持ちを述べる。「穏やかな薄曇り」、「曇ったり晴れたりする」ような陽気は、花にはとても良い。しかし、蘇軾は「自分のケチが原因で雨を招いてしまうのではないか」と気がかりになる。「自分の吝嗇が原因で雨が降る」は、宋代に巷間で言われていた「ケチをすると（罰が当たって）風雨にあう（慳値風，吝値雨）」という諺を用いたもの⁽⁶⁾。「彩雲が消えやすい」とは、瑞香花が散りやすいことを表現している。「鶉鴒」はホトトギス。ホトトギスが鳴き始めると、草々は枯れるという⁽⁷⁾。この二句は、風雨が起こったりホトトギスが鳴いたりして瑞香花が散り枯れるのを心配する。これに続く最後の二句は、瑞香花が明朝になると散ってしまうのを惜しみ、「せめて絵に描いて残しておこう」という思いを綴る。

蘇軾はこの詩を書くと同時に、三首連作の「西江月」詞を作った。まず、「真覚院で瑞香花を愛でて作った三首（真覚院瑞香三首）」という小序のある第一首目を読んでみる。

西江月

公子眼花乱発，老夫鼻觀先通。領巾飄下瑞香風。驚起謫仙春夢。／后土祠中玉蘂，蓬萊殿後鞦韆。此花清絕更纖穠。把酒何人心動。（『傳幹注坡詞』卷二）

【大意】君は瑞香花の美しさに目がくらみ，年寄りの私はこの花を見る前に甘い香りを鼻で嗅ぎつける。瑞香花の香りは楊貴妃のスカーフに焚きこんだ芳香のようで，また，謫仙人であつた李白の春の夢を覚ますほどの濃厚さである。／瑞香花は，揚州にある后土祠に咲く瓊花^{けいか}のようで，蓬萊殿^{ほうらいでん}に咲く牡丹のようだ。この花は清雅を極めながら，艶麗でもある。杯を持ってこの花を見れば誰もがみな心を動かす。

冒頭二句は，曹輔と蘇軾とが，瑞香花の美しさと香りの良さに魅せられたことを述べる。「君は瑞香花の美しさに目がくらみ」というのは，前の「次韻曹子方竜山真覺院瑞香花」詩の「ひとたびこの気高い花に出会ってから」（曹輔は）堅い心をやや変えた」と繋がる。ただ，詩が控えめな表現に止めているのに対して，詞は見たまま，感じたままを綴っている印象を受ける。これに続く二句は，唐の楊貴妃（ようきひ／719～756）と李白（りはく／701～772）の逸話を用いて，瑞香花の香りを褒め称える。楊貴妃が，玄宗皇帝（在位712～756）と親王が碁を打っているのを見てみると，風が吹いて彼女のスカーフが飛び，楽人の賀懷智（がかいち／生没年不詳）の頭巾に落ちた。しばらくして，賀懷智は身をよじってそれを落としたが，家に帰ってみると，全身が香氣に包まれていたという⁽⁸⁾。また，李白は長安（今の陝西省西安）に出て来た時，賀知章（がちしょう／659～744）に「謫仙人（罪を犯して人間界に落とされた仙人）」と呼ばれた⁽⁹⁾。また，唐の杜甫（とほ／712～770）は，この話をベースにして，「飲中八仙歌」を作り「李白は一斗の酒を飲んで百篇の詩を書きあげ，長安の盛り場の酒屋で酔って眠り込む。天子からお召しがあっても船に乗り込めず，私は酒中の仙人だ，と称している（李白一斗詩百篇，長安市上酒家眠。天子呼来不上船，自称臣是酒中仙）」と詠った。本詞の「謫仙人であつた李白の春の夢を覚ますほどの濃厚さ」というのは，この杜甫の詩を踏まえる。「長安の酒場で酔い潰れる謫仙人も，瑞香花の香りを嗅げば，たちどころに目を覚ます」ということである。

後半も瑞香花の賛辞が並ぶ。「后土祠」は，揚州（今の江蘇省揚州）にあった大地を祀るやしろ。ここに咲く瓊花はことに有名で，「天下に二本無し」と称された⁽¹⁰⁾。また，「蓬萊殿」は，唐の時代，洛陽（今の河南省洛陽）に建てられた宮殿の名。牡丹は中国人が最も好む花で，唐の時代から愛好され始め，特に洛陽で栽培が盛んになった。北宋の大文人である欧陽脩（おうようしゅう／1007～1072）は『洛陽牡丹記』を著し「洛陽の地味^{ちみ}は花の生育に最も適し，牡丹の花は天下一の美しさといえる（洛陽地脈花最宜，牡丹猶為天下奇）」と記している。瑞香花を宮殿に咲く牡丹に喩えるのは，最上級の賛辞である。最後の，この花は上品でありながら艶めかしいとは，男心をつかんで離さず，酒席でこの花を見れば誰もが虜になる魅力をいう。

次に，「宴席の客が私の前作に唱和したので，私は更に前作の韻字を使って作った（坐客見和，復次韻）」という序のある「西江月」詞の第二首目を読んでみる。

西江月

小院朱欄幾曲，重城画鼓三通。更看微月轉光風。歸去香雲入夢。／翠袖爭浮大白，皂羅半揜斜紅。灯光零落酒花穠。妙語一時飛動。（『傳幹注坡詞』卷二）

【大意】小さな中庭の赤い欄干はうねうねと続き、街中から時刻を告げる三度の太鼓が聞こえて来る。更に見れば、瑞香花は三日月に照らされ、風に吹かれ、輝き揺れる。帰宅した後も、香る雲のようなこの花が、夢に出て来そう。／妓女たちは先を争って大きな酒杯を勧め、^{まげ}髻を包む黒い薄絹には斜めに赤い花が挿してある。灯火は弱くなっているけれども、酒の花は綺麗に咲いている。酒席では、素晴らしい言葉が次々と飛び交う。

詞の冒頭は、瑞香花が咲く真覚院の中庭と欄干を描写する。「街中」は、杭州の街の中。そこから聞こえて来る「三度の太鼓」の音は、夜を告げる時の太鼓である。目を転ずれば、空には三日月が上る。蘇軾たちは、時間を忘れて瑞香花を愛でた。そして、瑞香花が「夢に出て来そうだ」と言う。

詞の後半は、酒宴を詠う。妓女は酒を勧め、酒席の人々は頭巾に瑞香花を斜めに挿し、座は大盛り上がりである⁽¹¹⁾。本詞の序に「坐客」とあるように、当日の宴席には、蘇軾と曹輔以外に、杭州の役人たちも加わっていた。蘇軾たちも含め、座にいた者はみな酔って上機嫌になり、調子に乗って戯れに赤い瑞香花を頭巾に斜めに挿した。「灯火は弱くなっている」とは、灯火の燃料である油が残り少ないことであり、時間の経過を表す。「酒の花」は、酒を杯に注ぐ時にできる泡。それが「綺麗に咲いている」というのは、酒が注がれるとすぐに飲み干され、また注がれては干され、杯には常に注がれたばかりの酒があることを意味する。つまり、夜が更けても、酒を飲むペースが落ちず、酒宴は終わることを知らないのである。最後は、詞と詩の応酬が盛んに行われている様子を描写する。「素晴らしい言葉」は、詞詩に書かれた語、あるいは、見事な語が綴られた詞詩それ自体を指す。それが「次々と飛び交う」というのは、酒席の人々が競って詞詩を作っていることをいう。

更にもう一首、「真覚府にある一本の瑞香の名を、曹輔は知らず、紫丁香だと思っていた。そこで前作の韻字を使い（詞を作って）からかった（真覚府瑞香一本、曹子方不知、以為紫丁香、戲用前韻）」という序のある第三首目の「西江月」詞を見よう。

西江月

怪此花枝怨泣，託君詩句名通。憑將草木記吳風。繼取相如雲夢。／点筆袖沾醉墨，謗花面有慚紅。知君却是為情穠。怕見此花撩動。（『傳幹注坡詞』卷2）

【大意】この花が悲しんで泣いているのももっともだ。君がこの花の名を「紫丁香」と間違えて詩を作り、それが広く世に伝わってしまったのだから。君は草木から呉（杭州）の風物を描いた。それは、司馬相如が雲夢^{うんぼう}を詠んだことを受け継ぐ。／君は筆に墨を付け、酔って袖を墨で汚してしまい、この花に失礼を犯したので、恥ずかしさで顔を赤くしている。でも、私は知っている、君は愛情が深いために、花を見て心が動くのを恐れ

ていたのを。

この第三首目は、前作と内容を異にする。終始、曹輔が花の名前を間違っただけをからかっている。まず、瑞香花は、君が花の名を「紫丁香（ライラック）」と間違えて詩を作り、それが知れ渡ってしまったから、悲しんで泣いている、と述べる。そして、その詩は、植物を詠むことで杭州（呉）の風物を描いたものであり、前漢の司馬相如（しばしょうじょ／前179～前117）が雲夢（今の湖北省にあった大湿地帯）を詠んだことを受け継ぐという。この二句は、司馬相如の「上林の賦」（『文選』巻八所収）が、西晋の左思（さし／250？～305？）に批判されたことを踏まえる。「上林の賦」は、皇帝の御苑である上林苑を詠んだものであるが、その中には、実際には植えられていない異国に産する珍しい植物を、あたかも上林苑に生えているかのように描いた部分がある。それに対して、左思は「三都の賦の序」（『文選』巻四所収）の中で、「上林の賦」に描かれている「果物や木々をよく考えてみると、その地に生えたものではない（考之果木、則生非其壤）」といい、「言葉においては表現を美しく飾ることができているけれども、意味においては嘘であり根拠は無い（於辞則易為藻飾、於義則虚而无徴）」と批判した。蘇軾は、ここで、曹輔が花の名の間違えたことを、司馬相如が実際には無い植物を恰も有るように描いたことに重ねる⁽¹²⁾。曹輔としては、前漢を代表する文人の司馬相如に喩えられたのは至上の喜びであるが、「嘘でもあり根拠もない」と批判を受けた「上林の賦」を持ち出されては、苦笑いするしかなかっただろう。

さて、詞の後半も、この「間違い」の理由についての言及が続く。「筆に墨を付け、酔って袖を墨で汚してしまい、この花に失礼を犯した」というのは、酒に酔ったから間違いを起こしたということである。更に最後の所では、間違いの原因を「君はこの花に対する愛情が深く虜になってしまうのが怖いばかりに、よく見ることが出来なかったから」と言う。曹輔の間違いは、むしろ、花の美しさが引き起こしたことだと弁護する。

以上、曹輔と一緒に真覚院へ瑞香花を見に行った時に作られた詩詞を読んだ。その詩は、終始、瑞香花を褒め称える。深い山奥に生えて穢れが無く、香りは仄かで品があり、色は淡い所がことのほか趣深い。そして、「秋蘭」に匹敵するほど美德を有し、天女が降らせる花びらのようだ、と綴る。品格のある美しさを前面に出す手法である。この花の美しさは、堅物の曹輔でも、その心をいささか動かすほどの魅力を持つと言う。また、自分の吝嗇のために、あるいは、風雨が起こったり、ホトトギスが鳴いたりして瑞香花が散り枯れるのを心配する。そして、散る前に絵に描き残そうとする。

これに対して詞は、まず第一首目で、詩と同様に瑞香花の美しさを詠む。ただ、その描き方は詩と異なる。曹輔は美しさに目がくらみ、蘇軾は甘い香りに惹かれる。また、楊貴妃と李白の逸話を出し、香りの濃厚さを綴る。そして、瓊花、牡丹になぞらえ、清雅であると同時に艶麗でもあると言う。更に、その美しさを、酒を飲みながら見れば誰もがみな心を動かすと称える。詩が上品な美しさを描いたのに対して、詞は濃厚、妖艶な魅力を綴る。これに続く第二首は、瑞香花を詠っているけれども、むしろ真覚院、酒宴の描写の方が多い。小さな中庭に続く赤い欄干、街から聞こえて来る時の太鼓。これ

らは、静寂に包まれた真覺院の様子である。それに対して、後半は一転して賑やかな酒宴に変わる。酒を盛んに注ぐ妓女たち、酔っ払って頭に瑞香花を挿す客人、夜が更けても重ねられる杯、そして、次々と詠まれる傑作な詩詞。本詞では、その後半に、瑞香花を前にして酒宴を満喫している蘇軾たちが描かれている。第一首の「その美しさを、酒を飲みながら見れば、誰もがみな心を動かす」を受けたものである。それに対して、第三首目は曹輔の「ミス」だけを綴る。彼が瑞香花を紫丁香と間違えて詩を作ったことをからかう。「酔ってこの花に失礼を犯したので赤面している」、「花への愛情が深いために、花を見て心が動くのを恐れて直視できなかったのでしょうか」と、かなり遠慮の無い言い方をする。詩の「君は堅い節操を持ち、歌や笑い声に耳を冷静に傾けている。ところが、ひとたびこの気高い花に出会ってからは、堅い心をやや変えた」とは、対照的な表現である。詩の抑えた口調に対して、詞では、瑞香花を一目見るやその美しさに魅了されメロメロになっている曹輔を詠っている。

三、「次韻答馬中玉」詩と「虞美人」詞、「木蘭花令」詞

元祐六年二月二十八日、蘇軾を都に召還する命が下った⁽¹³⁾。蘇軾は三月に杭州を発つことになったが、その時、友人の馬城（ばせい／？～1102）も、故郷に帰るため杭州を離れることになった⁽¹⁴⁾。蘇軾は馬城との別れに際し、「馬城の詩に唱和する（次韻答馬中玉）」詩⁽¹⁵⁾、「虞美人」詞、「木蘭花令」詞の三首の作品を作っている。以下、まず「次韻答馬中玉」詩を読み、次に「虞美人」詞、「木蘭花令」詞を見てみる。

次韻答馬中玉

坡陀巨麓起連峰，積累當年慶自鍾。靈運子孫俱得鳳，慈明兄弟孰非龍。河梁會作看雲別，詩社何妨載酒從。祇有西湖似西子，故應宛轉為君容。（『蘇軾詩集合注』卷33）

【大意】起伏の激しい山麓，峰が連なり立ち，君は壮年になり，善行を積み重ねて，家には幸福が自然と集まって来ている。謝靈運は子孫がみな優秀な才能を備え，荀爽は兄弟がみな非凡であった。橋には空の雲を見ながらの別れがつきものであり，作詩グループが酒を携えて加わっても構わない。このような中で，とりわけ西施のような西湖が，君のために，美しく化粧をしている。

本詩は，冒頭，風景描写から始まる。但し，それは単なる眼前の景を綴ったものではない。起伏のある山麓に群がり聳える峰々は，次の句の「家には幸福が自然と集まって来ている」ことの隠喩である。それに続く二句は，南朝宋の謝靈運（しゃれいうん／385～433）と後漢の荀爽（じゅんそう／128～190）を借りて，馬城の子や孫，兄弟がみな優秀なことを褒め称える。「靈運」は，謝靈運のこと。彼の子供である謝鳳（しゃほう／生没年不詳），更に孫の謝超宗（しゃちょうそう／430～？）は，共に好学の士で文才があった⁽¹⁶⁾。また，「慈明」は，荀爽のこと。彼には八人の兄弟がいたがみな優秀で「荀氏の八竜」と呼ばれた⁽¹⁷⁾。

詩の後半は、別離に話題が移る。「河梁会作看雲別」の句は、前漢の李陵（りりょう／？～前74）の「蘇武に贈る三首（与蘇武三首）」詩を踏まえる。その第一首目に「我々二人が共に過ごせる良い時は再びやっては来ないが、別れは目の前に迫っている。…仰ぎ見ると浮雲が勢いよく飛び去り、たちまち次々と過ぎ行く（良時不再至，離別在須臾。…仰視浮雲馳，奄忽互相踰）」とあり、第三首目に「手を取り合って橋の上まで来たが、旅人の君よ、夕暮れにどこへ行こうとするのか。道を行きつ戻りつして、悲しみのために別れられない（携手上河梁，遊子暮何之。徘徊蹊路間，悵悵不得辞）」と言う。李陵は友人の蘇武（そぶ／前140頃～前60）との別れを嘆き、空の浮雲を見る。そして、橋の上で別れようとするが、蘇武はなかなか旅立つ決心がつかない。蘇軾は自分と馬城とを、李陵と蘇武に重ね合わせている。本句の「橋」での「雲を見ながらの別れ」という表現には、楽しく過ごした時を惜しみ、なかなか別れの踏ん切りがつかない思いが込められている。そんな辛い別れには、自分たち以外にも、作詩仲間が酒を携えて加わった方がいい。同僚、友人を加え、ワイワイやって笑顔で見送ろうという思いである。そして、最後に、杭州の美の象徴である西湖を出して、「わざわざ君のために、美しく化粧をしていますよ」と言い、送別の言葉に代えている。この表現は、以下の蘇軾の詩を想起させる。

水光潋灩晴方好，山色空濛雨亦奇。欲把西湖比西子，淡粧濃抹總相宜。

【大意】（杭州の西湖は）日を反射する水面の波が遙かに続き晴れた日こそ美しいが、周囲の山が霞む雨の日もいい。西湖を西施に喩えてみれば、薄化粧も厚化粧も両方似合っている。

この詩は、熙寧六年（1073）に作られた「西湖の湖畔で酒を飲んだが、初め天気は晴れ、その後雨が降った。そこで作った二首（飲湖上初晴後雨二首）」詩の第二首目である。杭州の風光明媚な「西湖」を、春秋時代（前770～前403）越の美女である「西施（西子）」に喩え、「晴れでも雨でも素晴らしい」と称える。蘇軾は馬城に「絶世の美女である西湖も、君との別れを惜しんでいるよ」と語りかけているのである。

さて、次に「木蘭花令」詞を見よう。この詞には、「馬城の作った詞の韻に唱和した（次馬中玉韻）」という小序が付いている。つまり、馬城がまず蘇軾を送別する詞を作り、そのお返しとして作ったのが「木蘭花令」詞である。そこで、蘇詞を見る前に、馬氏の詞を確認する⁽¹⁸⁾。

来時呉会猶残暑，去日武林春已暮。欲知遺愛感人深，灑淚多於江上雨。／歡情未拊眉先聚。別酒多斟君莫訴。從今寧忍看西湖。抬眼盡成腸斷處。

【大意】（君が）来た時、呉会はまだ残暑が残っていたが、去る日、武林（杭州）は春が既に終わっている。君が杭州の民に残した仁愛の深さを知ろうと思うなら、彼らが流した涙が、川に降る雨よりも多いのを見ればいい。／（酒席でも）楽しい思いが湧く前に眉を顰めてしまう。別れの酒は多く酌み交わそう、君よ、酒はもう十分だと断らない

でくれ。今から後は、西湖をととても見てはいられない。目を挙げれば、至る所すべて断腸する場所だから。

本詞は、都に召還される蘇軾を送別する作である。蘇軾は二年前の元祐四年（1089）四月、杭州に赴任する際、都の開封（今の河南省開封）を出発し、陳州（今の河南省淮陽）、商丘（今の河南省商丘）、宿州（今の安徽省宿州）、楚州（今の江蘇省淮安）、揚州（今の江蘇省揚州）、潤州（今の江蘇省鎮江）、常州（今の江蘇省常州）、蘇州（今の江蘇省蘇州）、秀州（今の浙江省嘉興）を経て、七月に杭州に着いた。第一句目の「君が来た時、呉会はまだ残暑が残っていた」というのは、この時のことを指す。「呉会」は今の江蘇省南部および浙江省北部の地。つまり、蘇軾がこの時辿った旅程の、揚州から杭州までの地を指す。時に季節は晩夏から初秋であった。一方、いま蘇軾は杭州を離れる。時に晩春三月であり、暦の上ではまだ春だが、馬城は散る花を見て「春は既に終わった」と感じた。「武林」は、杭州の旧称。杭州にある武林山から取ったものである。これに続く二句は、蘇軾の善政を称える。彼は仁愛をもって民を治めた。民もそれを十分感じ、蘇軾を慕っている。このたびの蘇軾の離任に、杭州の民は、みな涙を流して悲しんでいる。「民に残した仁愛」とは、蘇軾が在任中、杭州の民に施した愛情を指す。

詞の後半は、全て別れの悲しみが綴られている。馬城は、親しい蘇軾との酒席ではあるが、とても楽しむ気になれない。それは、これが送別の席だから。楽しいという思いが湧く前に、別れの悲しみで、眉を顰めてしまう。明日、蘇軾は旅立つ。今日が最後の酒となる。だから馬城は「とことん酒を飲もう。だから、君よ、酒を断らないでくれ」と言う。馬城と蘇軾は、たびたび連れ立って西湖に遊びに行った。西湖には二人の思い出の場所が至る所にある。ところが、これからは、二人一緒に西湖を訪れることはない。別れの詞の最後に西湖を詠み入れるのは、先に見た「次韻答馬中玉」詩の結びに「とりわけ西施のような西湖が、君のために、美しく化粧をしている」とあるのを想起させる。

さて、蘇軾はこの詞を贈られ、そのお返しに「木蘭花令」詞を作った。

木蘭花令

知君仙骨無寒暑。千載相逢猶旦暮。故將別語惱佳人，要看梨花枝上雨。／落花已逐回風去。花本無心鶯自訴。明朝歸路下塘西，不見鶯啼花落處。（『傳幹注坡詞』卷11）

【大意】私は知っている、君が仙人のような人物で、寒さ暑さを意に介さないことを。千載一遇も、君にとってはよくあることに過ぎない。君はわざわざ別れの言葉で妓女を悩ませ、彼女が涙を流す姿を見ようとした。／散った花びらはもう旋風^{つむじかぜ}を追って飛んで行った。花はもともと心情が無く、ウグイスはひたすら鳴く。私は明朝、下塘の西から都に戻るが、ウグイスが鳴き花が散る場面をもう見ることはない。

先に見た馬城の「玉樓春」詞の後半には、蘇軾との別れの悲しみが綴られていた。それを受けて詠んだのが本詞である。ところが、本詞は、馬城の投げかけた悲しみの言葉を、正面から受け止めていない。却って戯れの言葉を並べて答えている。

まず蘇軾は馬城の人となり「仙人のようで、超然とし、我々の出会いも、よくあることと思っている」と述べる。彼は物事に恬淡とした性格であった。そんな彼が蘇軾に詞を贈り、「今から後は、西湖をととても見てはいられない。目を挙げれば、至る所すべて断腸する場所だから」と言ったものだから、蘇軾は「おいおい君らしくもない。どういう風の吹き回しだい」と思った。そこで、「わざわざ美女を泣かせるために、別れの辛い思いを詞に書いたのでしょうか」とからかい半分に答えたのである⁽¹⁹⁾。

さて、本詞の後半は、花とウグイスを詠む。ただ、その花は、旋風に吹かれるまま飛び去って行く。それはなぜかといえば、花はもともと「ああしよう、こうしよう」という思いを持っていないからである。これは、自らの運命に身を任せて生きる蘇軾自身をいう⁽²⁰⁾。一方、ウグイスは、花びらが風に散り飛んでいくのを悲しんで、ひたすら啼く。このウグイスは、いつもは恬淡としていながら、蘇軾との別れに際して「楽しい思いが湧く前に眉を顰めてしまう。別れの酒は多く酌み交わそう、君よ、酒はもう十分だと断らないでくれ。今から後は、西湖をととても見てはいられない。目を挙げれば、至る所すべて断腸する場所だから」と訴えた馬城である。しかし、蘇軾は、明朝、「下塘（地名。今の杭州の北に位置し船着き場があった）」の西から都に戻る。いくらウグイスが啼いても、もう蘇軾を引き留めることはできない。旅立った後、「ウグイスが鳴き花が散る場面はもう見ることはない」⁽²¹⁾。この餞の言葉は、「もう、私たち二人が一緒にいることは無いのです」ということで、馬城に対する「明日の朝、本当にお別れなのですよ」という惜別の情を綴ったものである。

さて、蘇軾はこの時、更にもう一首、「浙憲（^{せっけん}職名）に就任した馬城を送る（送浙憲馬中玉）」という序のある「虞美人」詞を作っている。

虞美人

帰心正似三春草。試著萊衣小。橘懷幾日向翁開。懷祖已瞋文度。／禪心已断人間愛。只有平交在。笑論瓜葛一枰同。看取靈光新賦，有家風。（『傳幹注坡詞』卷8）

【大意】君の望郷の念はまさに春の草のようで、君は老萊子が着た小さな五彩衣を身に付けようとしている。懷に入れたミカンをいつお父上に差し上げるのか。お父上は君が帰省しないので既に立腹のことだろう。／君の心は既に清く落ち着き、世俗の愛欲を断ち切っている。付き合いは本当に親しい友人だけにしている。君たち父子は仲良く、碁を打つのも真剣勝負をする。君の書かれたばかりの賦を見ると、家風がお有りです。

本詞は、親孝行、父子に関する逸話、故事を並べ、馬城の帰郷を見送る。馬城は親を思い帰郷を急ぐ。冒頭の「帰心」とは文字通り、故郷に帰りたいという気持ちである。次句の「老萊子が着た小さな五彩衣を身に付け」は、老いた親の面倒を献身的にみた親孝行の逸話を踏まえる。戦国時代の楚の国に老萊子（ろうらいし／生卒年不詳）と呼ばれる男がいた。彼は親孝行として有名で、老いた両親の面倒を見ていたが、彼らを喜ばせるため、七十歳になっても赤ん坊の着るカラフルな子供服を着ていたという⁽²²⁾。更に「懷に入れたミカン」というのも、親孝行譚に基づく。後漢の陸績（りくせき／187

～219)は、六歳の時に袁術(えんじゅつ／155以降～199)に会った。その時、袁術はミカンを出したが、陸績はそのミカンをこっそり三つ懐に入れた。ところが、彼が辞去する際、お辞儀をした時にそのミカンが懐から落ちてしまった。袁術が訝って問うと、陸績はひざまずき「母にあげるために持って帰りたいのです」と答えた。袁術はこれに感服したという⁽²³⁾。この本詞前半第二、三句は、帰郷する馬城を老萊子と陸績に喩え、孝行息子と称えている。前半最後は、東晋の王述(おうじゅつ／305～368。「懷祖」は字)が息子の王坦之(おうたんし／330～375。「文度」は字)を溺愛した話を引く。王述は王坦之が帰省すると、大人になった王坦之を自分の膝にのせて抱いたという⁽²⁴⁾。蘇軾は、この子供を溺愛する父親の話を踏まえつつ、「お父様はなかなか帰郷しない君のことに腹を立てていますよ。早くお帰りなさい」と、からかい交じりに語りかける。

それに続く後半では、まず、馬城の人となりを述べる。「世俗の愛欲を断ち切っている」というのは⁽²⁵⁾、先の「木蘭花令」詞に言う「あなたは仙人のような人物で、寒さ暑さを意に介さない」と重なる。馬城は、利権には全く目を向けず、交友関係は旧友のみと付き合っていた。同時に作られた二首の詞に、彼の人となりが繰り返して書かれていることから、彼はよほどクールな人物であったのだろう。だから蘇軾は再度ここでも同じことを述べたのである。この後の「あなたがた父子は仲良く、碁を打つのも真剣勝負をする」という表現は、晋時代(265～419)の王導(おうどう／276～339)と王悦(おうえつ／生卒年未詳)父子の逸話を踏まえる。王導は王悦を非常に可愛がっていた。ある時、二人は碁を打ったが、王悦は負けまいと必死になって打った。すると、王導は笑いながら「互いに親子なのに、何でそんな手を打つのだ」と王悦に言ったという⁽²⁶⁾。

最後も、後漢の王逸(おういつ／生没年不詳)と王延寿(おうえんじゅ／140頃～165頃)父子の逸話を出す。王逸と王延寿は共に文才が有ることで有名であった。特に、王延寿の「魯の靈光殿の賦」は、魯国の靈光という宮殿を詠んだ名作として誉れ高かった。後に、著名な文人・学者である蔡邕(さいよう／132～192)が魯国を訪れて靈光殿を賦で詠もうとした。しかし、王延寿の「魯の靈光殿の賦」を見て、その素晴らしさに自分は作るのを辞めたという⁽²⁷⁾。この「虞美人」詞は、帰郷する馬城を孝行者と称え、彼が父親の愛を一身に受けていることをいい、前作と同様に彼の人となりを述べて、最後は父から受け継ぐ高い文才を称賛する。

以上、蘇軾の馬城との別れに際して作った「次韻答馬中玉」詩、「虞美人」詞、「木蘭花令」詞を見た。それらの内容をまとめれば、次のようになるだろう。詩では、風景描写を使い馬城一族の非凡さを称え、別れの時には詩と酒がつきものであると言い、「特に西湖が美しく装って君を見送る」という言葉で結ぶ。故郷に帰る馬城に対して、一族を褒め称え、別れの言葉を贈っている。それに対して「虞美人」詞は、まず馬城を仙人のような人物と言い、彼の超然とした人となりを述べる。そんな馬城が別れに際して、「断腸の思い」と言ったものだから、「わざわざ美女を泣かせるために、別れの辛い思いを詞に書いたのでしょうか」と、からかい気味に答える。「おいおい君らしくもない。どういう風の吹き回しだい」という思いである。後半では、詞の常套語である花とウグイスを用い、都に戻る自分と、別れを惜しむ馬城とを巧みに表現している。別れを惜しむ馬

城を鳴くウグイスに喩え、明朝旅立つ自分を散る花になぞらえている。あるいは、馬城はこれまで蘇軾に対して、そっけない態度を取っていたのではないか。ところが、実は蘇軾に好感を抱いており、別れに際して、その気持ちを詞で初めて明かした。蘇軾はそれを知り「虞美人」詞を書いて応え、ちょっとした戸惑いと「私は明日の朝、旅立ってしまう。残念ながらもう遅いよ」という思いを綴ったのではないか。それに対して、「木蘭花令」詞では、堅苦しくなく、心温まる、そして微笑ましい親孝行、父子に関する逸話、故事を並べ、馬城の帰郷を送っている。七十歳になっても赤ん坊の着るカラフルな子供服を着た老萊子、六歳の時に懷に入れたミカンを落として見つかった陸績、また、成長した息子の王坦之を膝の上に載せて可愛がった王述、必死に碁を打つ息子の王悦に「そんなに真剣になるな」と言った王導。皆それぞれ個性的な人々であり、だからこそ、親孝行、父子の絆がより強く伝わって来る。

馬城も、彼らに負けず劣らず個性的な人物であり、深い親への愛情を持っていた。彼の人となりについては、「虞美人」詞にも「心は既に清く落ち着き、世俗の愛欲を断ち切っている」と、先の「木蘭花慢」詞と同様、非常にクールであったことが書かれている。但し、普段はクールに見える馬城も、「玉楼春」詞で彼自身が綴ったように、蘇軾との別れを嘆き、篤い友情を抱いていた。おそらく、「玉楼春」詞と「木蘭花慢」詞を応酬した後、二人は心うち解けて語り合ったのではないか。そこで、蘇軾は、馬城が一見クールでありながら、実は親を深く愛する人物であることに気付いた。その新たな発見を、蘇軾はこの「虞美人」詞で詠ったように感じられる。個性豊かで親思いの馬城が帰郷するのを、少々からいぎみに、老萊子、陸績、王坦之と王述、王悦と王導等の逸話を並べて見送ったのである。

四、Ⅲ「和林子中待制」詩と「西江月」詞

杭州を発った蘇軾は、都に行く途中、潤州に寄った。そこで、彼の後任である林希（りんき／生没年不詳）と会った。林希は杭州知事に転任することは決まっていたが、この時、未だ前任地の潤州に止まっていた⁽²⁸⁾。蘇軾は林希に会い、「和林子中待制」詩と「西江月」詞を作っている。まず、「和林子中待制」詩を見てみよう。

和林子中待制

両翁留滞各皤然，人笑迂疎老更堅。共把鷺兒一尊酒，相逢卯色五湖天。江辺遺愛啼斑白，海上先声入管絃。早晚淵明賦歸去，浩歌長嘯老斜川。（『蘇軾詩集合注』卷33）

【大意】我々二人の老人は長く地方長官としてくすぶり、お互い白髪になり、人は私が世渡り下手で、老いてますますひどくなるのを笑う。（以前）共に黄金の美酒を取り一杯飲んだのは、薄っすらと雲のかかった空の下、五湖で会った時だった。君は長江沿いの潤州で善政を行い、土地の古老たちは離任を悲しみ嘆き、君の噂は、杭州着任前に海上から伝わり、既に杭州の人々は称えている。私は早晚、陶淵明のように隠退の詩歌を作り、大声で歌い、斜川の地で余生を過ごすつもりだ。

詩題の「和林子中待制」は、「林希の詩に唱和した」という意味。「林子中待制」は林希のこと。「子中」は字、「待制」は俸給の等級を表す。蘇軾が唱和した林希の詩は、残念ながら伝わらない。

さて、詩の第一句、二句目は、自分たち二人の身の上を述べる。蘇軾は、今、都に召還されるとはいえ、これまでに、杭州副知事を皮切りに、密州（今の山東省諸城）、徐州（今の江蘇省徐州）、湖州（今の浙江省湖州）、登州（今の山東省蓬萊）の知事を歴任して、再び杭州に来ている。その間に、朝政誹謗の罪で捕えられ黄州（今の湖北省黄岡）に流された。官途に就いてから、都にいたのは約三年半だけである。文字通り「世渡り下手」であり、「老いてますますひどく」なっている。蘇軾は「このたび、自分は都に呼び戻されることになった。しかし、果たして、いつまで都にいたことができるだろうか。また、遠からず地方に出ることになるだろう」と思っていたに違いない。また、「人は…笑う」というのは、裏返せば、君だけは笑わずに分かってくれるということであり、蘇軾は林希が自分の唯一の理解者であると暗に言っているのである。第三句目の「共に黄金の美酒を取り一杯飲んだのは、薄っすらと雲のかかった空の下⁽²⁹⁾、五湖で会った時」とは、「五湖」が今の湖州の北にある太湖のことであることから、おそらく二年前の元祐四年六月、蘇軾が都の開封から杭州へ赴任する途中、潤州知事から湖州知事に転勤する途中の林希に会った時のことを詠ったものと思われる⁽³⁰⁾。五湖で会った時、蘇軾はまさか二年後に、自分の後任として林希が杭州にやって来るとは思わなかったろう。

詩の後半は、まず林希の政治の手腕を称える。潤州の民は彼の離任を嘆き、杭州の民は彼の赴任を喜ぶ。民の立場から林希の政治手腕を褒めるところが、いかにも蘇軾らしい。最後は、自分を陶淵明（とうえんめい／365～427）になぞらえ、隠棲願望を述べる。陶淵明は、薄給のためにペコペコ頭を下げることに嫌気がさし、官職を辞して故郷に戻ることにした。また、「斜川の地」は、今の江西省都昌近くの地で、陶淵明が職を辞する五年前にこの地を訪れて、友人と風景を愛で、酒を酌み交わし、詩を作り合っただけの地である。蘇軾が陶淵明の生き方に傾倒したことは、既に論じたが⁽³¹⁾、本詩にも、その思いがはっきりと綴られている。

さて、次に同時に作られた「西江月」詞を見てみる。

西江月

昨夜扁舟京口，今朝馬首長安。旧官何物与新官。只有湖山公案。／此景百年幾變，箇中下語千難。使君才氣卷波瀾。与把新詩判斷。

【大意】私は昨晚、小舟で京口に到着し、そして今朝、馬首を都に向ける。前任者は何を新任者に差し上げようか。ただ湖と山を詠んだ詩篇しかない。／この（杭州の）風景は百年間で何度も変わったけれども、その風景の変化を描くことは至難の業。しかし、新知事の才気は波を巻き上げるほどに長けている。どうか、新たな詩を作って（杭州の湖山の美しさを）称えてほしい。

蘇軾は昨晚、潤州まで船でやって来た。そして、今朝、ここで馬に乗り換え都に向か

う。この時、蘇軾は、潤州で一泊しかなかったようである。原文にある「長安」は唐の首都であるが、ここでは、北宋の都である開封を意味する。「前任者」は蘇軾のことであり、「新任者」は林希を指す。「湖と山を詠んだ詩篇」は、杭州の西湖やそれを取り巻く山々を詠った詩のことである⁽³²⁾。蘇軾は新旧知事の引継ぎで渡す物は「詩」しかないという。いかにも文人の蘇軾らしい。

後半も、やはり詩のことを詠む。自分を非才と謙遜し、林希を文才に富むと言う。杭州は百年の間に様々姿を変えて来た。それを言葉で書き残すのは自分には難しかったけれども、林希であれば詩で杭州の湖山の美しさを詠むことができる、と彼の詩才を称える。

以上、潤州で林希と会った時に作られた詩詞を見た。この二首の作品は、非常に対照的である。詩は二人の不遇を述べ、自分の無能を自嘲し、林希の役人としての有能さを称え、隠棲の思いを綴る。言わば、役人生活への思いが書かれている。それに対して詞は、知事の引き継ぎを詠んでいる。しかし、そこで扱っているのは、「詩」である。蘇軾は新知事の林希の作詩能力を称え、彼に「引継ぎで渡す物は、『詩』しかない。私にはできなかったが、どうか君よ、杭州の美しさを詩で見事に描いてくれ」と頼むのである。詞では、役人生活ではなく、文人生活が前面に出ている。

五、まとめ

以上、元祐六年に作られた三組の詩詞を考察してみた。そこから導き出された詩詞の差異をまとめれば、以下のとおりである。

詩は、仏教関係の逸話も交え、相手の役人としての才能、手腕を称え、戯れの要素は少ない。それに対して、詞は、思わず微笑んでしまうような軽妙な逸話、故事を多く使い、からかいや戯れの言葉を多く混ぜ、相手の文才を称賛し、賑やかな酒席、酒を次々と注ぐ妓女を描いている。また、同じ美しさを描くにしても、詩が格調の高さを強調するのに対して、詞は濃厚さ、妖艶さを描き出している。詩が背筋を伸ばして端座する姿であれば、詞は気ままな姿勢で足を投げ出している砕けた姿である。また、詩からは「お堅い官僚としての蘇軾」が読み取れるが、詞からは「粋な文人としての蘇軾」が見えて来る。あるいは、「しらふの蘇軾」と「ほろ酔いの蘇軾」と言い換えることができるかもしれない。言わば、「硬」「雅」「堅」の詩に対して、「軟」「俗」「艶」の詞という対照関係である。

この詩詞の相違は、当時の文学の担い手と、詩詞それぞれの成り立ちが大きく影響している。詩は、『詩経』（紀元前九世紀から前七世紀にかけて作られた詩を収めた中国最古の詩集）から綿々と続く伝統文学であり、知識人必須の教養の一つであった。それ以上に、官僚登用試験である科挙の問題に作詩も課され、官僚を目指す者は誰でもが懸命に勉強しなければならない受験科目であった。だから、彼らは、国を背負う官僚、政治家としての気概や度量を詠んだ、雄大で格調高い詩が書けるように日々練習努力を続けたに違いない。一方、北宋時代、文学の担い手は、その官僚、政治家が大半を占めてい

た。それは、当時、文字を駆使して思いを綴る能力を身に付けていたのが、政治家、官僚に限られていたからである。かくして、詩は「お堅い官僚としての姿」を詠む文学様式となったのである。それに対して、詞は唐に興り北宋時代から盛んに作られ始めるようになった新興文学であり、もともと酒席で歌う座興のようなものであった。つまり、遊びの文学ともいえ、詩のような硬さは無い。官僚が、日々の激務から解き放され、酒も入った時に、思いのままに作ることを許された自由な文学であった。言ってみれば、詞は「息抜きの文学」であった。であれば、そこに綴られる言葉は、詩とは対照的な、くだけた、戯れを交えたものになり、「粹な文人としての姿」が描き出される。以上の事が、「硬」「雅」「堅」の詩と、「軟」「俗」「艶」の詞という違いを生み出したと考えられるのである。

本稿では、元祐六年に作られた「同一年作品群」を考察の対象としたが、今回は蘇軾の農村を詠んだ詩詞を比較して、その相違を明らかにしてみたい。

〔提要〕

北宋時代、在韻文文學上、有詩和詞的兩種。當時的作者也寫詩，也寫詞。他們對詩和詞之認識，當然有不同的差別，這是很有趣的研究題目。在本文，作者比較蘇軾在元祐六年間同時同地所做之詩和詞來，闡明雙方不同的特性。其結果是如下：詩是夾雜佛教典故，贊揚對方為人處事手腕，遊戲性不多；詞則夾雜輕鬆的逸話、不自覺地發出微笑的故事，用開玩笑的手法，贊揚對方的文才，吟詠熱鬧的酒席和歌女。就對“美”的描寫手法來說，詩是重視格調，詞則寫妖艷。還有，詩就像是循規蹈矩的模範生，詞則像是奔放的自由人。從詩里可以看到的是正派的官僚、沒喝醉的蘇軾像，從詞里出現的却是瀟灑的文人、醉酒的蘇軾。可以说，詩是“硬”、“雅”、“堅”的文學，詞則“軟”、“俗”、“艷”的文學。這種差異原因於兩者的文學性格。詩是傳統文學、科舉的科目之一、官僚必須的教養。詞則是新興文學、本來在酒席上的余興、文人的遊戲文學。

〔注〕

- (1) 拙著『新興と伝統 蘇軾詞論述』（上海古籍出版社，2005）参照。
- (2) 「蘇軾の熙寧七年に作られた詩詞について」（『総合文化研究』第17巻第3号，2012），「蘇軾の元豐元年に作られた詩詞について」（『風絮』第8号，2012）参照。
- (3) 『蘇軾年譜』巻30に「曹輔らと真覺院で瑞香花を觀賞し，詩と詞が残っている（与輔等真覺院賞瑞香花，有詩及詞）」とある（下冊953頁）。
- (4) 『全宋詩』巻736に曹輔の詩を収録するが，当該作品と見做されるものは収められていない。
- (5) 『西湖遊覧志』巻6に「竜山のやや北側が玉厨山であり，以前，真覺院があった（竜山稍北為玉厨山，旧有真覺院）」とある。
- (6) 蘇軾の「李公枳と酒を飲む約束をしたが，この日，大風が吹いた（約公枳飲是日大風）」という詩の注に引く『文酒清話』に「諺に『ケチであれば風と雨に遭う』という言い伝えがある（蓋諺有『慳値風，嗇値雨』之説也）」と見える。『蘇軾詩集合注』巻16参照。
- (7) 『漢書』巻87上「揚雄伝」の「徒恐鷦鷯之將鳴兮，顧先百草為不芳」に付けられた顔師古注に「鷽

鵲」は「常に立夏から鳴き始め、鳴けば草々は枯れる（常以立夏鳴，鳴則衆芳皆歇）」とある。

- (8) 北宋の楽史の『楊貴妃外伝』巻下に賀懷智の言葉として「昔、皇帝は夏に親王と碁を打ち、私に琵琶の独奏を命じ、楊貴妃は碁盤の横で対局を見ていた。…その時、風が吹いて楊貴妃のスカーフが飛び私の頭巾に落ちた。しばらくして、身をよじると、やっと落ちた。家に帰り着いてみると、満身に香気が漂っていることに気付いた（昔上夏日与親王棋，令臣独彈琵琶，貴妃立于局前觀之。…時風吹貴妃領巾于臣巾上。良久，因身方落。及歸，覺滿身香氣）」とある。
- (9) 李白の「酒を前にして賀知章を思い起こす（対酒憶賀監）」という詩の序に「太子賓客の職にあった賀知章公は、長安の紫極宮で私と会うとすぐに、私のことを謫仙人と呼んだ（太子賓客賀公，於長安紫極宮一見余，呼余為謫仙人）」とある。
- (10) 南宋の周密の『齊東野語』巻17「瓊花」に「揚州后土祠瓊花，天下無二本」とある。
- (11) 原文の「翠袖爭浮大白」の句、「翠袖」は妓女の着る緑の衣の袖。ここでは借りて妓女をいう。「浮大白」は酒を腹一杯飲ませること。「浮」は元々罰として酒を飲ませることで、ここでは妓女が容赦なく酒を勧めることを意味する。「大白」は大きな酒杯。また、次句の「皂羅」は、役人が被る頭巾のこと。
- (12) この蘇軾の「司馬相如が雲夢を詠んだことを受け継ぐ」という句について、一点、補足する。「司馬相如が雲夢を詠んだ」作品は、「上林の賦」ではなく「子虚の賦」という作品である。この「子虚の賦」は、確かに雲夢という湿地に生える植物を詠むことで、この湿地の様子を巧みに描いている。『傳幹注坡詞』は、この句に注を付けて「漢の司馬相如は『子虚の賦』を作り、雲夢沢の豊かさを綴った。だから、山川土石、草木禽魚、描かれていないものは無いのだ（漢司馬相如為子虚賦，而載雲夢之饒，故山川土石，草木禽魚，無不畢究）」と解説している。ところが、この「子虚の賦」には、本詞の「瑞香花を紫丁香と間違えた」こととの結び付きは見いだせない。結び付があるのは、本論で述べているように「上林の賦」である。この点については、既に『蘇軾詞編年校注』が「蘇軾は『上林の賦』を『子虚の賦』と記憶違いをした。だから『司馬相如が雲夢を詠んだことを受け継ぐ』という句がある（蘇軾却把《上林賦》誤記成《子虚賦》。故有『繼取相如雲夢』）」と指摘している（中冊659頁）。以上のことから、蘇軾が元々いいたかったのは「上林の賦」に間違いなく、小稿では「この二句は、司馬相如の『上林の賦』（『文選』巻八所収）が、西晋の左思（さし／250？～305？）に批判されたことを踏まえる」とだけ指摘し、蘇軾の記憶違いは、ここでの言及に止める。
- (13) 『蘇軾年譜』巻30（下冊953頁）参照。
- (14) 馬城が故郷に帰ることになった経緯は未詳。なお彼は当時、兩浙路提刑の職にあった。
- (15) 本詩の作成経緯は、詩題から見ると以下になる。蘇軾と馬城が杭州を発つことになり、蘇軾の親友である劉季孫（りゅうきそん／1033～1092）が、二人のために西湖の湖畔で酒宴を開いてくれた。その席上で三人は詩を作り合ったが、本「次韻答馬中玉」詩は、馬城が書いた蘇軾送別の詩に、答えるために作った返事の詩である。ただ、残念なことに、馬城の詩は残っていない。なお、詩題中の「馬中玉」は、馬城のこと。「中玉」は字である。
- (16) 『南史』「謝靈運伝」に「謝靈運の子供は鳳であり、鳳の子供は超宗である。みな学問を好み文才があった（謝靈運子鳳，鳳子超宗。好学有文辞）」とある。
- (17) 『後漢書』「荀淑伝」に「（慈明は）幼くして学問を好み、十二歳で『春秋』と『論語』を理解した。

潁川（今の河南省中部にあった地）の人々は彼らを『荀氏の八童の中で、荀爽は天下無双の秀才だ』と言った（幼而好学，年十二能通『春秋』『論語』。潁川為之語曰『荀氏八童，慈明無双』）」とある。

- (18) 馬氏の詞は、『全宋词』に「玉樓春」として収められている。
- (19) 本詞の「佳人」について、『蘇軾全集校注』（中華書局，2002）は「この「佳人」は馬城をからかって言ったものである（此处「佳人」戲指馬城）」と注を付け（661頁）、『蘇軾詞新釈輯評』（中国書店，2007）は「“佳人”は、馬城を指す（“佳人”，指馬忠玉）」（1110頁）と述べている。一方、『蘇軾全集校注』中の『詞集』（河北人民出版社，2010）は「故將別語惱佳人，要看梨花枝上雨」の二句について「馬城が沈痛な饞の言葉で、酒席にいた妓女たちの惜別の心情をかきたてたことをいう（言馬中玉以沈重的送行之語引動了在座官妓的惜別感情）」と言い、特に「梨花枝上雨」を「美女が泣くことを形容する（形容美女的哭泣）」と説明している（619頁）。本詞の「梨花枝上雨」は、白居易の「長恨歌」に言う「玉のような顔が寂しげに涙をハラハラと流す姿は、春の雨に濡れる一枝の梨花の花のようだ（玉顔寂寞淚闌干，梨花一枝春帶雨）」の句を踏まえることは明らかである。この「長恨歌」の二句は、楊貴妃の泣く姿を「梨花の雨」と表現した名句である。であれば、本詞の「梨花枝上雨」も女性の泣き顔と解するのが妥当である。そこでここでは『蘇軾全集校注』中の『詞集』に従い、妓女と解釈する。
- (20) 「落花已逐回風去。花本無心鶯自訴」の二句について、『蘇軾全集校注』は「落花が風に舞うという表現で自分が天子の命令を受けて杭州を離れ、成り行きまかせであることを暗に喩え、ウグイスが鳴くという表現で見送る者の悲痛な心情を喩えている（以落花回風暗喻自己奉詔離杭，自然隨遇，以鶯啼訴喻指送別者的痛惜心情）」と説明している（619頁）。また、『蘇軾詞新釈輯評』も「蘇軾は自分が杭州を離れ都に赴く境遇を“落花”に喩え、散った花びらが既に旋風に吹かれて飛び去ったと表現している。その実、落花はもともと風を追いかけようとする思いは持っておらず、自分は自分の運命をコントロールできないのだ（东坡把自己离杭赴京的处境比作作了“落花”，说它的凋落花瓣已经被回风吹逐而去了。其实，落花本是无心逐风的，只是自己不能掌握自己的命运）」と解説している（下冊1110頁）。
- (21) 「明朝歸路下塘西，不見鶯啼花落處」の二句について、『蘇軾全集校注』は、「あした都に帰る道は下塘の西から出発し、二度とこの地でウグイスが鳴き花が散る所を見られなくなる（兩句說明天回歸京城之路由下塘西邊出發，再也看不到這裏鶯啼花落之處了）」と説明している（619頁）。
- (22) 『傳幹注坡詞』に引く『高士伝』に「老萊子は両親に仕え、七十歳になっても、常に五色の模様のある服を着て、子供のように泣く素振りをして、親を喜ばせようとした（老萊子孝奉二親，行年七十，常身著五色斑斕之衣，為小兒戲啼，欲親之喜也）」とある。なお、『芸文類聚』巻20に引く『列女伝』にも類似の表現が見られる。
- (23) 『三国志』『呉志』の「陸績伝」に「陸績は六歳の時，九江（今の江西省九江）で袁術に会った。その時，袁術がミカンを出したところ，陸績はその中の三つを懐に入れた。ところが，彼が去ろうとして，お辞儀をした時に，ミカンが懐から落ちてしまった。袁術が「客として招かれた時でもミカンを懐に隠すのか」と言うと，陸績はひざまずき「母にあげるために持って帰りたいのです」と答えた。袁術はこれに感服した（績年六歳，於九江見袁術。術出橘，績懷三枚。去，拜辞墮地，術謂曰，「陸郎作賓客而懷橘乎」。績跪答曰，「欲歸遺母」。術大奇之）」とある。
- (24) 『晋書』「王湛伝」に「王坦之が帰省して父親に会うと，王述は王坦之を可愛がり，既に成長して

- いるけれども、なお彼を膝の上に載せて抱いた（及還家省父，而術愛坦之，雖抱置膝上）」とある。
- (25)『傳幹注坡詞』は「禪心已斷人間愛」の句について『法鏡經』の「凡夫は六塵（心を汚して煩惱を起こす色，声，香，味，触，法のこと）を貪って，飽き足ることがない。いま聖人は執着心を絶ち切り，六情（喜怒哀楽愛惡）から生まれる飢餓感を取り除いた（凡夫貪著六塵，不知厭足。今聖人斷除貪愛，除六情飢饉也）」という記述を引いて注としている。
- (26)『晋書』卷65「王悦伝」に，王悦が「常に優しい顔つきで親に仕えたので，父の王導は彼を溺愛した。王導は王悦と碁を打ったが，王悦は必死になって自分が優位になる手を打った。すると，王導は笑いながら『互いに親子なのに，何でそんな手を打つのだ』と言った（事親色養，導甚愛之。導嘗共悦弈棋，争道。導笑曰『相与有瓜葛，那得為爾邪』）」とある。詞の本文の「瓜葛」はウリとクズ。親類，縁者を喩える。また「枰」は，碁盤。「一枰同」は，碁盤を囲んで碁を打つこと。
- (27)『後漢書』卷110上「王逸伝」に，王延寿が「若い時に魯を訪れ，『魯の靈光殿の賦』を作った。その後，蔡邕もこの賦を作ったが，完成前に，王延寿が書いた「魯の靈光殿の賦」を見るに及んで，絶賛して，とうとう筆を収めてしまった（少遊魯国，作『魯靈光殿賦』。後蔡邕亦造此賦，未成，及見延寿所為，甚奇之，遂輟翰而已）」とある。
- (28) 李之亮『宋兩浙路郡守年表』（巴蜀書社，2001）145頁参照。
- (29) 詞の原文の「鶯兒」は，アヒルの子。黄色い色をしていることから，黄金色の美酒を意味する。「卵色」は，殻の青白い色。薄っすらと雲のかかった空を形容する。
- (30) 前注（28）に引く李之亮『宋兩浙路郡守年表』「湖州」，「潤州」から，林希が元祐四年に湖州知事から潤州知事に転任したことが分かる（188頁と145頁参照）。
- (31) 拙著『新興と伝統』「蘇軾和蘇過父子与“游斜川”」参照。
- (32) 原文の「湖山公案」について，『蘇軾全集校注』は「ここでは蘇軾が西湖を詠んだ詩歌を指す（這裏指蘇軾吟詠西湖的詩歌）」と解説する（677頁）。

〔付記〕 本論文は平成25年度日本大学商学部研究費（個人）研究成果の一部である。